

こころやさしいなきむし

植田 樹里

わたしには、三さいのきはるといっておとうとがいる。かおはわたしに、にているけど、めだけは、しげんのあかちゃんみたいなたれめをしている。ほっぺをさわるといちごマシユマロみたいにもふもふしてきもちがいい。こえがたかくて、みんなにいつもかわいい、かわいいとちやほやされている。たしかにかわいいけれど、わたしにとって、おとうとは、なきむしで、まいにちけんかをするあいてだ。けんかをするとおとうとはわたしのことをだいきらいとかならずいってくる。このときわたしのこころは、こなごなになる。そして、おとうとなんていなくなればいいとおもう。

ある日、わたしのぬいだくつを、おとうとがさわっていた。つかれてイライラしていたのもあって、

「かっさにさわらんでよ。」

と、わたしはめを三かくにしておとうとを、どなりつけた。すると、

「じゅりのくつそろえようしたのに。もう、じゅりなんてだいちっらしい。」

なきながら、まだあかちゃんことばのおとうとがさげんだ。まただいつきらいっていった。だけど、そのときは、いつものきもちとはちがっていた。なっているおとうとがかわいそうやら、もうしわけないやら、ごめんねとありがとうのきもちがわたしのなかで、ごちゃまぜになった。

このあいだも、おとうとがひとりでコップにぎゅうにゅうをいれようとしていたから、「だめっ。あぶない。こぼれるよ。」

と、わたしがとっさにさげんだ。おとうとは、まるでかいじゅうにあったときみたいに、からだをびくっとさせて、

「じゅりのいれよう、もったのに。(おもったのに。)」
と、えんえんないていた。

かんがえてみると、おとうとはいつもわたしのことをおもってくれていた。ただのなきむしじゃなくて、こころやさしいなきむしだったことにきがついた。そうおもうと、なんだかきゅうにおとうとをだきしめたくなった。

「きはる、たくさんかせてごめんね。だいすきだよ。そして、いつもありがとう。」

評価のポイント

弟との日常が目に浮かぶぐらい、様々な感情やエピソードが丁寧にえがかれていた。感受性の豊かさが表れている作品。